太田東西かわら版　２０１４．３

再び、被災地に立つ

２月１０日から１週間のお休みをいただいて、家族で東北に出掛けました。
東日本大震災から、今月で３年になります。

3 年前の震災 2 週間後には、夫婦で被災地のお客様の元に出向きました。
今回、「今度は家族で」と決心したのは、私自身が復興の状況を知りたかった
そしてもう一つは、息子たちに体験させたかったからです。

息子らの世代は、ネットに依存しています。
自宅に居ながら簡単に知識・情報を得て、わかった気になってしまう。
一つ一つの情報を深く吟味するヒマもなく、次から次に情報が入ってくる。

これでは、「自分で考える力」が育ちません。
代わりに、災難は他人事という「平和ボケ」が育ちます。

その情報の信ぴょう性は高いのか？　欠けているのか？
それは現地に行って、この目で見て、この耳で聞く以外に判断できません。

テレビ、新聞の伝えることは真実として、メディアに洗脳されている高齢者はさながら、ネットにハマって思考力を奪われた若者と同じです。
「人間の成長は、光よりも“ 闇 ”の世界を体験することにある！」という
偏屈な父親に引率されて、息子らがまず向かった先は・・・

福島第一原子力発電所に最接近できる富岡町。（表紙の写真の場所）
ここは、地震と津波の被害だけではなく、原発事故（放射能汚染）にさらされ
“ ゴーストタウン ”と化していました。

“ 死んでしまった ”線路と駅

目にした光景は、震災後、テレビで見た状況と変わりありませんでした。
案内役のガイドさんがおっしゃいました。
「地震と津波だけの被害ならば、3 年経って人の動きが戻ったかもしれません。
原発の事故が、この町を再起不能にしてしまいました」

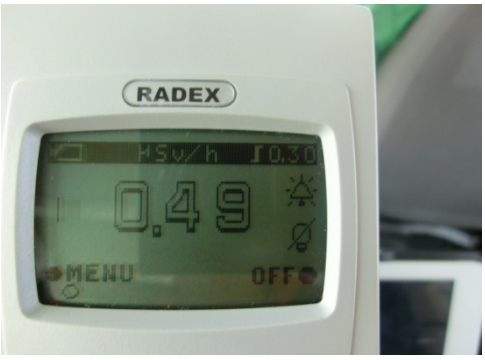
これは商店街を通行している時の写真

どこまで行っても人影がない・・・

人っ子一人、誰もいない・・・

人間の姿、生き物の姿がない・・・

車内では、線量計を手にしていました。
０．３マイクロシーベルト以上になると
警報音がなります。



数値はどんどん上がっていきました。
（この日最高０.７まで）
正直、怖かった・・・

肝心の除染作業、着実に進んでいるのか？
現場で目にしたのは、汚染物を保管した黒い袋の山、山、山・・・
看板には平成 26 年 3 月 31 日までとなっていましたが、この黒い袋を焼却して
無くせるはずもなく、未来永劫、ずっと放置され続ける。
汚染物の処理もできないまま、政府は原発再稼働しようとしています。

病気と同じく、人間は「根本」に目が行かないようです・・・

ガイドさんが指を差しました。
「あの電柱の看板、見てください。
原子力エネルギーは子どもたちの未来に有用なんだと
ずっと電力会社は宣伝し続けて来ました。
石炭石油と違って、地球にやさしくて安全なんだと。

震災以降、福島では離婚が増えています。
子どもの被ばくを案じて、今後どうするのか？
夫婦の考えが合わず口論になったり、原発の仕事に
従事している家族に対して、怒りをぶつけたり。

経済的な理由から別居も増えています。
妻子は被ばくの心配のない西日本に移り、夫だけが
地元に残って働いているという具合です」

『子どもたちの未来のために』
スローガンに掲げていた原子力発電は

「故郷」「家族団らん」　　・・・子どもたちから奪ったのです
「放射能汚染」「健康不安」　・・・子どもたちに残したのです

翌日、最大の死者が出た宮城県石巻市を訪れた際、地元の人から聞きました。
漁港の近くに保育園があった。漁港で働くお母さん方は、その日も子どもを
園に預けて仕事をしていた。2 時 46 分、大地が揺れ、津波警報が発令された。
お母さん方は、高台に避難せずに、我が子を迎えに行こうと園に向かった。
道路は大渋滞。そこに津波が来た。お母さん方は、車ごと海に消えて行った・・・

その現場に立ち、亡くなられたお母さん方の勇気ある母性に黙とうしながら、
いつしか３．１１を“対岸の火事”にしていた自分を恥じました。